

漢字研究の一視点

林 四 郎

I. 現代日本語の表記体系と漢字

ここで扱う漢字は、現代の日本人が現代の日本語を表記するために用いている文字としての漢字である。

表記には表記法の体系がある。漢字かなまじり文、かな文字文、ローマ字文は、それぞれ独立に、現代日本語のための表記体系をなしている。漢字だけを用いる表記体系は、過去の日本語のためにはあったが、現代日本語のためには、もはや存在しない。

漢字かなまじり文は、現在、大方の日本人の間で最も強力な表記体系となっている。かな文字文は、片かな体系と平かな体系とに分れるが、平かな体系は、ほとんど力が無い。片かな体系も、力が強くはないが、タイプライターや、コンピュータの印字文字としては確かな存在である。平かな体系も、過去においては、いわゆる女文字として、一方における有力な存在であったが、今は、単一文字体系としての存在を主張していないように見える。ローマ字文も、一般的な人気は非常に低いと言わざるを得ないが、その文字が他の種類の文字との共用を許さないだけに、体系としての存在には、犯しがたい力がある。現実には使われなくても、理論的に、常に存在価値がある。

漢字かなまじり文では、漢字とかなとの間で、守備範囲の協定ができてきた。平がなは文型の枠組みを表示し、漢字が、その枠組みの中に入る個々の概念を表示するというのが協定の基本事項である。この協定には、たくさんの例外事項があるが、文型表示には専ら平がなを用い、漢字を文型表示に用いることはないという一事は、現代語では例外なく守られている。これに対し、概念表示の方は、純粋に漢字だけでそれをするには無理があり、平がなが、かなりこれを援けている。また、外来語で概念表示をする時は、漢字に並ぶ資格で片かなが用いられる。

漢字は、現代の日本語において、概念表示の主要部分を担当している。その担当のし方を、語の側からも、字の側からも、見て行く必要がある。

II. 単語の構成に働く漢字の力

概念表示の道具に用いられるものは単語である。現代日本語の単語は、語構成の要素を、非常に大きく漢字に仰いでいる。「あいさつ」とか「てきめん」とかの言葉が、今はこのようになかで書かれることが多くても、それらが本来2字ずつの漢字で書かれる語だという意識は、少くとも中年以上の日本人にはあるだろう。「やまみち」「やしき」など、字音語でない単語についても、大部分の人は、「山道」「屋敷」という2字ずつの漢字を必然的な構成要素として思い描くのではあるまいか。

現代語の語彙の実態調査に基づいて、数多くの単語が、それぞれ、どういう漢字を構成要素としているか、各漢字がどれだけの単語の構成要素として働いているかを、きちんと記述する必要がある。

国立国語研究所の雑誌・新聞の大量語彙調査の結果から、三千数百の漢字が現代語の単語を表記するためにどのように使われているか、ほぼその全容を知ることができる。筆者は、現在、文部省科学研究費、特定研究「言語」の一斑「国語教育効率化のための漢字の記号特性の研究」により、国立国語研究所の語彙調査の結果を、漢字を中心に総合し、漢字と語彙との関係を記述している。ここでは、一例によって、今後の整理方法を示すこととしたい。

III. 一字の事例による漢字造語機構の記述

事例を「合」という漢字に取る。この字を例とすることに格別の理由は無いが、造語の幅が広く、いろいろな造語パターンが見られるものの一つとして選んだ。

以下の記述においては、抽象論を避け、すべて事例によって述べることにする。

「合作」「合宿」「合唱」「合奏」という語がある。これらの語において、「合」の字は、いずれも「ガッ」と発音され、二者以上のものがいっしょになることを意味している。そして、「二者以上がいっしょになる」ことが次の動詞で表わされる動作のための条件となるという共通性がある。言語形式で言えば、「合」

の字が、「二者以上の者がいっしょになって」簡単に言えば「合^{がっ}して」という副詞として働き、次の一字で表わされる動詞へかかっているのである。すなわち、

合作=合して作る
 合宿=合して宿る
 合唱=合して唱う
 合奏=合して奏する

という構造になっている。

「合流」「合議」「合同」「合弁」においては、「合」が「合して」という副詞の資格で、

合流=合して流れる
 合議=合して議する
 合同=合して同ずる
 合弁=合して弁ずる

と、おのおの、次の動詞へかかっている点で、語構造は「合作」等と同じである。しかし、発音が、こちらは「ゴウ」であって、「ガツ」とは違っている。「ガツ」と「ゴウ」は、漢音・呉音の違いというようなものではない。両者は、歴史的かなづかいなら「ガフ」と書かれる入声音の、共に変異形であり、本来同じものである。しかし、現代語の中では、はっきり別の音と意識される。

してみると、「合作」以下4語と、「合流」以下4語とは、前の1字における「合して」の意味及び語性と、後の1字「作」「流」等における動詞性1字漢語の性格とを共有しているわけである。ゆえに、これらの語は、

[合シテ V スル]

という連語形式(「V スル」は動詞の終止形を表わす)を基底に持ち、それが語と化するについて

「合」+[動詞性1字漢語]

という結合形式に従っている点が共通だと言える。異なるのは「合」の発音が「ガツ」となるか「ゴウ」となるかの1点だけである。

「合」が「合して」という副詞性を持つについては、さらに、「合」の字が「合する」あるいは「合う」「合わさる」などの動詞を基底に持つと解釈することができる。「いっしょになる」という意味での「合スル」「合う」「合わさる」の3語をここでの基底語と呼ぶことにする。

現代日本語において、「合作」「合流」等の8語(もちろん他にもあり得る)

が生成されるまでに、

基底語＝「合スル」「合う」合わさる」

基底連語形式＝〔合シテ V スル〕

語化形式＝「合」＋動詞性 1 字漢語

の 3 段階が踏まれたと見ることができる。そして、語化形式の中で、さらに「合」が「ガッ」と「ゴウ」とに分化すると見る。

今、このような過程を、できるだけ様式化してとらえるために、1 字の字音語に「漢語単子」という名称を与え、それが動詞性のものなら、「漢語動詞性単子」と呼んで「漢 V 単」と略記する。名詞性のものなら、「漢語名詞性単子」で「漢 N 単」、形容詞性なら「漢形単」と記す。

そうすると、今までの叙述は、次のように記されることとなる。

基 底 語	基底連語形式	語 化 形 式	語 例
{ 合う 合わさる 合スル }	合シテ V スル	^{ガッ} 合〔漢 V 単〕	合作、合宿、合唱、合奏
		^{ゴウ} 合〔漢 V 単〕	合流、合議、合同、合併

この〔基底語 → 基底連語形式 → 語化形式 → 語例〕の順序は、現代日本語の使用者の中で、語例欄の諸語が生成されるまでの過程を表わしていると見ることができる。言うまでもなく、ここでいう生成過程は、理論的に設定するものであって、現実界における歴史的生成過程を意味するものではない。

次に、「合」が同じく「合う」「合わさる」「合スル」の基底語を持ちながら、二字漢語の後要素になってできる語群がある。「化合」「混合」「和合」「融合」「集合」「会合」「連合」「結合」「複合」等である。これらは、共通に、〔V シ合う(合わさる / 合スル)〕という基底連語形式を持ち、かつ、「〔漢 V 単〕^{ゴウ}合」という語化形式を持っている。

化合＝化シ合わさる

混合＝混ざり合わさる

和合＝和シ合わさる

融合＝融け合わさる

集合＝集まり合わさる

会合＝会シ合スル

連合＝連なり合わさる

結合＝結び合わさる

複合＝かさね合わさる

という構成になっていると思われる。

同じ造語形式が、和語「合う」によって成立する一類型がある。この時は、結合の相手も和語の動詞であり、連用形の形をとる。例えば「落ち合う」「寄り合う」「溶け合う」「行き合う」「めぐり合う」などである。例えば、「落ち合う」は、二つの川が合わさって一つになることであり、「寄り合う」は複数の人間が寄って来て一つの集団になることである。漢語の「融合」と和語の「溶け合う」は、出来上りの形はまるで違うが、基底の構造は同じだと見られる。

和語のこの形は、「合う」が「合い」になって名詞の形を作りやすい。「落ち合い」「寄り合い」「めぐり合い」などは、むしろこの形の方がよく用いられるかも知れない。「連れ合い」という言葉などは、動詞「連れ合う」の形ではほとんど用いられないであろう。これらの名詞は、いずれも、合わさった結果の形を表わしている。

よって、この語群では、次のような生成過程を認めることができる。基底語は前の場合と同じであるから、記さない。（「和 V シ」は和語動詞の連用形を意味する）

基底連語形式	語化形式	語例
Vシ合わさる	(漢 V 単) 合 ^ワ	化合、混合、和合、融合、集合、会合、連合、結合、複合
	(和 V シ) 合う	落ち合う、寄り合う、溶け合う、行き合う、めぐり合う、乗合い、連れ合い

次に、「烏合の衆」の「烏合」と、魚の「血合い」の2語について構造を考えると、どちらも、「烏が集合する」「血が集合する」で、主語述語の関係で成り立っており、「合」の意味は、やはり「合う」「合わさる」「合スル」である。よって、ここに認められる生成過程は

基底連語形式	語化形式	語例
Nが合わさる	(漢 N 単) 合 ^ワ	烏合
	(和 N) 合い	血合い

となる。「N」は名詞を表わす「血合い」に「血合う」という語形は考えられず、他に語例も無いから、語化形式の所から「合い」とした。

「合」の基底語をこれまでと同じくするものに、もう一つ、「離合」という語がある。基底語は同じだが、基底連語形式が、これまでのどれとも違っている。「離」は「離れる」で、「合う」の反対概念を表わす。反対概念をいっしょにして一語とするのは、漢語に多い造語形式である。「上下」や「本末」は名詞における反対概念の結合、「明暗」や「軽重」は形容詞、「離合」「浮沈」などは動詞における反対概念の結合例である。

ここでは、次のような生成過程を認めることができる。

基底連語形式	語化形式	語 例
反意 V シたり合ったり	(漢 V 単) ^あ 合	離合

「合う」「合わさる」「合スル」を「合」の基底語とし、「合」を含んで出来る現代日本語の単語は、国立国語研究所の雑誌・新聞語彙調査の結果で見ると、大体、以上の通りである。「合」の基底語と扱った「合う」「合わさる」「合スル」の3語は、連語形式を基底とすることなく単独で生成される語例と見る。強いていえば、語化形式において、動詞になるための活用語尾を付けている。この場合は、基底に連語形式が無いのであるから、その欄に[独立]と書いておく。

以上で、「合」の基底語を「合う」「合わさる」「合スル」とする場合のすべての単語生成を述べ終ったので、これを一括して一覧表に示すこととする。

合の字による単語の生成過程

1. 基底語=合う、合わさる、合スル(「いっしょになる」の意)

基底連語形式	語化形式	生成語例
1.1 (独立)	1.1.1 ^あ 合 (活用語尾)	合う、合わさる
	1.1.2 ^あ 合 (活用語尾)	^あ 合する

1.2 合シテVスル	1.2.1 ^ゴ 合〔漢V単〕	合作、合宿、合唱、合奏、合評
	1.2.2 ^カ 合〔漢V単〕	合流、合議、合同、合併
1.3 Vシ合わさる	1.3.1 〔漢V単〕 ^ゴ 合	化合、混合、和合、融合、会合、連合、結合、複合
	1.3.2 〔和Vシ〕 合う	落ち合う、寄り合う、溶け合う、行き合う、めぐり合う、乗合い、連れ合い
1.4 Nが合わさる	1.4.1 〔漢N単〕 ^カ 合	烏合
	1.4.2 〔和N〕 合い	血合い
1.5 反意Vシたり合ったり	1.5.1 〔漢V単〕 ^カ 合	離合

以下、この方式に従って、国立国語研究所の語彙調査で見出された「合」の用語例を分析し、基底語から語例への生成過程として配置した一覧表をかかげる。基底語は全部で10語見出された。全体一覧表を示す前に、基底語だけの一覧表をかかげ、最も代表的な語例を一、二添えておく。

「合」の基底語一覧

	基底語	意味	代表語例
1	合う、合わさる、合スル	いっしょになる	合作、落ち合う
2	合う	合致する	合格、似合う
3	合う	共にする	かかり合う
4	合う	互いに～し合う	助け合う、競合
5	合わせる	いっしょにする	合体、組み合わせる
6	合わせる	合致させる	抱合せ、配合

7	合わせる	共にする	来合せる、居合せる
8	合わせる	対比する	照合、問合せる
9	合い	間	合榧、谷合
10	合い	〔意味あいまいな接尾的要素〕	色合、度合

以下、全体表の続きを記す。

2. 基底語 合う(「かなう」「合致する」「条件がそなわっている」の意)

2.1 〔独立〕	2.1.1 合 ^ム (活用語尾)	合う(圖 答えが合う、帳尻が合う、辻褄が合う)
2.2 Nニ合う	2.2.1 合 ^フ (漢N単)	合格、合法、合理、合憲
2.3 Nガ合う⇒～コト ⇒合うN	2.3.1 (漢V単) 合 ^フ	吻合、符合
	2.3.2 合い (和N)	合鍵、合印、合言葉
	2.3.3 合い (漢N単)	合図、合性
2.4 ドノヨウニ合う	2.4.1 (漢副単) 合 ^フ	暗合
2.5 Vシ合う	2.5.1 (漢V単) 合 ^フ	適合
	2.5.2 (和Vシ) 合う	似合う、見合う、釣合う、兼合い、出来合い

3. 基底語 合う(「共にする」の意)

3.1 Vシ合う	3.1.1 (和Vシ) 合う	かかり合う、取り合う(～わらない)、かち合う、立合う(→立会い)、出合う(出合え)
----------	----------------	---

4. 基底語=合う(「互いに～し合う」の意)

4.1 Vシ合う	4.1.1 〔漢V単〕 ^ゴ 合	競合、投合、談合
	4.1.2 〔和Vシ〕合う	(1) 射ち合い・う、かけ合い・う、斬り合い・う、話し合い・う、知り合い・う、競り合い・う、助け合い・う、取り合い・う、向い合い・う、押し合い・う、馴れ合い・う、にらみ合い・う、取組合い・う、奪い合い・う、探り合い・う、つかみ合い・う (2) 渡り合う、語り合う、すれ合う、ほれ合う、分け合う、励まし合う、喋り合う、抱き合う、混ざり合う、補い合う、睦み合う (3) 述べ合う、頼り合う、温め合う、喜び合う、甘え合う、泣き合う (4) 試合、待合、組合、保合、申合い、見合い
	4.1.3 〔混Vシ〕合う	愛し合う

5. 基底語 合わせる (「いっしょにする」の意) (注) *印は、その語例が他の分類項目にも入っていることを示す。

5.1 〔独立〕	5.1.1 合 ^ま (活用語尾)	合わせる、合わす (圖力を合わせて、手を合わす)
5.2 Nヲ合わせる ⇒～コト ⇒合わせたN	5.2.1 合 ^{ガツ} (漢N単)	合掌、合体、*合評
	5.2.2 合 ^{ゴウ} (漢N単)	合名、合弁、合資、合意
	5.2.3 合 ^{ゴウ} (漢N単)	合板、合金
	5.2.4 合わせ (和N)	合味噌、合酢、合せ帯

5.3 合わせて V スル	5.3.1 ^{ガツ} 合 (漢 V 単)	合算
	5.3.2 ^{ゴク} 合 (漢 V 単)	合計、合成、合祀
5.4 V シ合わせる	5.4.1 (漢 V 単) ^{ゴク} 合	統合、綜合、總合、都合、調合、縫合、*結合、*混合
	5.4.2 (和 V シ) 合わせる	組み合わせる、つなぎ合わせる、綴り合わせる、縫い合わせる、混ぜ合わせる、結び合わせる、撚り合わせる、煉り合わせる、重ね合わせる、接ぎ合わせる、貼り合わせる
5.5 合わせ同意 V スル	5.5.1 ^{ガツ} 合 (漢 V 単)	*合併
5.6 同意 V シ合わせる	5.6.1 (漢 V 単) ^{ゴク} 合	*併合、**糾合、鳩合
6. 基底語=合わせる(「合致させる」「調和させる」「組みにする」「触れさせる」等の意)		
6.1 (独立)	6.1.1 ^カ 合 (活用語尾)	合わせる、合わす(調子を合わせる、顔を合わせる)
6.2 N ヲ合わせる ⇒ ~ゴト ⇒ 合わせる	6.2.1 (和 N) 合わせ	顔合せ、*柄合せ、*肩合せ、*裾合せ
	6.2.2 合わせ (和 N)	合せ鏡
6.3 V シ合わせる	6.3.1 (漢 V 単) ^{ゴク} 合	配合
	6.3.2 (和 V シ) 合わせる	抱合せ(る)、申合せ(る)、盛合せ(る)、取合せ(る)、組合せ(る)、向合せ(る)、引合せ(る)、詰合せ(る)、炊合せ(る)、煮合せ(る)、食合せ、噛合せ、埋合わす

7. 基底語=合わせる(「共にする」の意)

7.1 Vシ合わせる	7.1.1 (和Vシ) 合わせる	泊り合わせる、来合わせる、巡り合わせる、隣合わせる、居合わせる、待合わせる、*仕合せ
------------	------------------	--

8. 基底語=合わせる(「対比する」の意)

8.1 Nヲ合わせる	8.1.1 (和N) 合わせ	絵合せ、貝合せ、歌合せ、*柄合せ、手合せ、*肩合せ、*裾合せ
8.2 Vシ合わせる	8.2.1 (漢V単) 合 <small>ゴウ</small>	照合
	8.2.2 (和Vシ) 合わせる	照し合わせる、思合わせる、考え合わせる、問合わせる、打合わせる、しめし合わせる、にらみ合わせる、付合わせる、突合わせる、裁合わせる

9. 基底語=合い(「間」の意)

9.1 合のN	9.1.1 <small>あい</small> 合 (和N)	合榫(相榫)、合間、合着
	9.1.2 <small>あい</small> 合 (外N)	合オーバー、合コート
	9.1.3 <small>あい</small> 合 (漢N)	合服
	9.1.4 <small>あい</small> 合の(和N)	<small>あい</small> 合の手
9.2 Nの合	9.2.1 (和N) <small>あい</small> 合	谷合、山合(山間)、間合

10. 基底語=合い(意味のはっきりしない接尾的要素)

10.1 N 合い	10.1.1 (和 N) 合 ^{あい}	色合、沖合、頃合、筋合、肌合、割合、訳合、場合
	10.1.2 (漢 N 単) 合 ^{あい}	度合、歩合、風合、気合
	10.1.3 (漢 N) 合 ^{あい}	意味合い

以下、この表に説明を加えていくが、全語例を取り上げては長くなり過ぎるので、説明を省く所もある。

2は、「条件にかなう」という意味の「合う」を基底語にもつと考えられる語の集団である。独立形式は「合う」であるから、「合」の字は、ここでは、「あう」の語幹「あ」の部分を担当する。「わ・い・う・う・え・え」と活用する語尾の部分は、かなが担当する。

2.2の「N=合う」という基底連語形式は、私たちの無理なく自覚するところであり、

- 合格=格(資格)に合う
- 合法=法にかなう
- 合理=理にかなう
- 合憲=憲法に合致する

のような認識が、これらの語の基底にあると見ることができよう。しかし、これらの語も、同じ構造を基底にもつとは言いながら、語の運用に当っては、互いの間の語性の相違が現れる。「合格」は「合格する」と動詞に使われるが、「合法」「合理」「合憲」には「する」はつかない。「合法的」「合理的」というのが最もよく使われる形である。「合格的」とは言わない。「合憲」は日常使われる語ではないが、使う時は「合憲だ」と形容動詞の語性を付与される。打ち消す時には、「不合格」「不合理」に対して「非合法」の形が用いられる。「合憲」を打ち消すためには「不」も「非」も適当でなく、「違憲」という別の言い方が用いられる。このような言い方は、「合法」に対しても「違法」があり、「合理」に対しては「背理」がある。もっとも、「違法」は「合法」の対であるよりも、「適法」の対と見た方がいいかも知れない。一語一語の性格は、微妙な所では、みな、互いに違って来る。

2.3 は、「合」が述語動詞として、名詞の主語を持つものの集まりである。2.3.1 は主述関係がそのまま語順に現れているもので、「吻合」は「吻(くちばし)が合う(上下うまく噛み合う)」、「符合」は「符(割り符の両辺)がぴったり合う」という構造になっている。基底連語形式において「～ガ合う」という基底から二つの矢印を出して「～コト」と「合う N」とを区別した。「～コト」というのは、「N ガ合うコト」で、基底連語形式がそのままの順で1語に固まり、名詞となり得る形を取っていることを意味する。「合う N」の方は、主述関係が連体修飾と被修飾の関係に変形されてから、その形が基底句となったものである。この形では、元来の主語が被修飾語となり、後要素の方に回っている。その後要素には、和語のもの(2.3.2)と漢語のもの(2.3.3)とがある。

2.3.2 の語例「合鍵」「合印」「合言葉」には、「鍵が合う」「印が合う」「言葉が合う」という基底句があり、2.3.3 の語例「合図」「合性」には、「図が合う」「性が合う」という基底句があると見たわけであるが、これには、当然、異論があり得る。少くとも、「図が合う」というような言い方が現実にあるとは私にも思えない。こういう構造を、理論上、仮設するだけである。試みに『言海』(明22)で「あひづ」「あひしやう」の項を見ると、「相図」「相性」と記している。『大言海』(昭7)では、太平記等からの引用をすべて「相図」の字で示しているが、「相性」の方には「合性」をも示し、かつ、こちらを上にかかげている。なお、「性」の項には「性が合ヘヌ」という句例も示してあるから、「合性」に「性が合う」の基底句を考えることには充分根拠があるろう。

一体に、本稿の考え方は、現代語についての共時論に終始するものであるが、言語は、流動する社会の中で混質的な複数の人間が使うものであるから、個々の単語にまつわる使用意識は、本質的に流動の相をもつことを考えなければならぬ。そうであれば、個々の語例について、基底句や基底語を考えるについては、どうしても、歴史的事情を考慮しなければならない面が出て来る。このことについては、後に再び触れるであろう。

2.4 の語例「暗合」は、「暗に合う」という基底句により「暗合する」と使われると見て、「暗」を副詞性漢語単子とした。

2.5 は、「合う」に動詞が先行する構造である。先行動詞を漢語単子が受け持つ例は「適合」以外には見当たらない。和語動詞が先行する例は「似合う」「見合う」「釣合う」とあり、外に、名詞の形で使われる「兼合い」「出来合い」がある。「兼合い」は、『言海』に「軽重、均シクシテ、偏ラヌコト。程ニ適フコト」とあるが、「兼ね」が何を表わすのか、的確にはとらえがたい。

次の3は、「[和 V シ]合う」という、和語の形でしか語例がないものである。先行動詞の動作を自分一人でしないで、他者と分け合う形とするものである。「かかり合う」も「取り合う」も関係をもつこと。この「取り合う」は「奪い合う」の意ではなく、ほとんど専ら「取り合わない」と打消しに使うものである。「奪い合う」の意のそれは、次の4項に属する。「立合う」「出合う」は、今は「立会う」「出会う」と書く方がずっと多くなったが、以前は「合」で書く方が普通だったようである。『言海』では、「であふ」「いであふ」を共に「出合ふ」で示し「出会ふ」とは書いていない。「出会」は「シュックワイ」という漢語にだけ当てている。現在の私の語意識で言うならば、「たちあう」はすっかり「立会う」になり、「であう」には「出会う」「出合う」の両語を生じたと考えたい。道で人とばったり会うのは「出会う」で、大部分の例はこちらである。「出合う」は、時代劇で屋敷に曲者が侵入したような場合にだけ「出合せ」と使うのだろうと思う。もう一語「かち合う」という例をこの仲間に入れたが、これは間違っているかも知れない。

4の項は語例が多い。「合」の字が和語の中で生きている姿は、この型のものの中に最も多く見出される。

ここでは「合う」が接尾的に使われ、先行動詞に「相互にそうする」という意味を添える。基底語が「合う」で、先行動詞の後につくという形は3項と全く同じなのだが、「合う」の意味が微妙に違う。先項のは、一つの行為を他者と分有することを表わし、本項のは、互いに働きかけ合うことを表わす。A B 2者の間で、AはBに向かってXの行為をし、BはAに向かって、同じくXの行為をする。

4.1.1よりも4.1.2の方が自然な形なので、そちらから説明する。

4.1.2は、和語動詞の連用形のあとに「合う」が付く形で、(1)(2)(3)の区別は、一語としての熟し方の度合を、私の意識で段階づけたものである。(1)は、一語としての熟合度が高く、その結果、「～合い」という名詞の形が安定し、むしろ、そちらの方がよく使われるものである。

「射ち合う」は、「射ち合って」「射ち合った」というふうにも使うが、それよりも、「射ち合いが始まった」とか「壮烈な射ち合いになった」のように、「射ち合い」の形で使う方が多いであろう。(→)にかかげた動詞は、以下、いずれも、「かけ合い」(かけ合い漫才)、「斬合い」(斬合いを演ずる)、「話合い」(話合いに応ずる)、「知合い」(知合いが多い)、「競り合い」(はげしい競り合い)、「助け合い」(助け合いの精神)、「取り合い」(恋人の取り合いをする)、「向い合

い) (向い合いの席に座る)、「押合い」(押し合いなら負けない)、「馴合い」(馴合いの行為)、「にらみ合い」(にらみ合いの状態)、「取組合い」(取組合いのけんか)、「奪い合い」(財産の奪い合い)、「探り合い」(腹の探り合い)、「つかみ合い」(つかみ合いのけんか)のように、名詞の形がよく熟しているものばかりである。

(2)の項になると、先行動詞と「合う」との間の熟し方が下がり、「～合い」の形が一般的でなくなる。「丁々はっしと渡り合う」というようなことはよく言うが「渡り合いをする」とは言わない。「語り合い」は言わないことはないが、あまり現代語の感じではない。「すれ合う」「ほれ合う」「分け合う」「励まし合う」「喋り合う」「抱き合う」「混ざり合う」「補い合う」「睦み合う」、いずれも「～合い」の形で使えないわけではないが、動詞の形の方がはるかに優勢である。これは、先行動詞と「合う」との結びつき方が(1)の諸例に比べて弱いことを示している。

(3)は、その結びつきがさらに弱いものの集まりである。「述べ合う」「頼り合う」「温め合う」「喜び合う」「甘え合う」「泣き合う」これらは、語形の上では確かに一つの動詞になっているが、意味の上で考えると、それらを一つの動詞として認めなければならぬ必然性は、無さそうである。語彙調査で拾われた例がたまたまこのようであっても、この調子でなら、「読み合う」「書き合う」「感じ合う」など、ほかに臨時の表現が文脈に応じて成立するだろう。しかし、この類のものが名詞になり、「述べ合い」「泣き合い」「書き合い」のように独立することがあろうとは思えないのである。

(4)に示した「試合」「待合」「保合」「組合」「申合い」「見合い」は、(1)から(3)への方向を反対にたどった所に見出されるもので、2語の連合が熟し過ぎた結果、特殊な意味をもって名詞に固まってしまい、動詞の用法を失ったものである。「試合」は、元来は「仕合」と書いていたもので、「試」は当て字であったが、今はこの字が定着してしまい、それとともに、「しあい」が「し合う」の名詞転成形であるという意識も、ほとんど私たちから消えてしまった。「待合」は、特別な場所の名となつて、「待合室」とはすっかり異質のものになった。「保合^{もちあひ}」は経済用語で、一般には使わない。「組合」に解説は要るまい。「申合い」は柔剣道や相撲などの競技で、試合ほどには正式でないマッチをすることを言う、私は理解している。「見合い」は「お見合い」で、「二人が互いに見合う」という動詞の意味は確かに生きているが、「見合う」とは決して言わない。相撲で行司が「見合つて」と言う時こそ、本当に見合う意味が生き

ている。あの仕切りのことを「力士が見合いをする」とは、また、決して言わない。

4.1.3に1語だけ「愛し合う」という語例がある。基底連語形式は4.1.2と全く同じなのだが、「愛」が字音語だから「愛する」を混種語と扱い、ために「[混Vシ]合う」という語化形式を設定した。この類型は、実際はかなり造語力があるので、「通じ合う」「論じ合う」「信じ合う」「尊敬し合う」「軽蔑し合う」「敵視し合う」など、語例は随分考えられる。しかし、「愛し合い」「論じ合い」のような名詞形は考えにくい。「通じ合い」だけは言いそうだが)

さて、4.1.1へ戻る。「競合」ということばは、何年か前、国鉄の事故で「競合脱線」なるものがあつた時にしきりに聞いたが、それまでは聞いたことがなかった。そのころ、周囲の国語学者からも、耳なれぬ言葉だという感想を聞いた。しかし、また同時に、少しも奇異の感をもたない人もあり、語感是人によって異うものだと感じた。この語の形に奇異の感をいだく人は、4.1の「Vシ合う」という類型が和語の中でだけ生産力を持ち、漢語の中ではほとんど働かないものであると感じている人であろう。「投合」は「意気投合」と使うのだが、これは「投じ合う」を基底とするのかどうか疑わしい。1.3.1の項に入れて「投じていっしょになる」と解した方がいいかも知れない。「談合」は「話し合う」と非常に近い所にあると考えてこの項に入れたが、これも談じていっしょになる」の感じの方が強いかも知れない。「～合」という漢語は、どうも「～し合う」を反映しにくいように私には感じられる。だから、「競合脱線」の「競合」も、「多くの原因が競い合っていて、はっきりどれとは決められない」という状況よりも、「多くの原因が複雑にからみ合って全体でひとかたまりになっている」という状況のように感じられる。これだと、むしろ「総合」に近い。先行動詞のあとにある「合」は、「～し合う」の意味では働きにくく、「いっしょにする」「いっしょになる」の意味で働きやすいという事情があるのではなからうか。

以上、これまでに述べた1から4までの項は、「合」が自動詞「合う」を代表して働くものばかりであった。次の第5項からは、他動詞「合わせる」の世界となる。

5の基底語「合わせる」は、「いっしょにする」の意味で、1の「合う」(いっしょになる)に対応する。

5.1の独立形式は、「合わす」「合わせる」の二つの形をもつ。「手を合わす」「心を合わせて...する」のように使われる。

5.2は、「Nを合わせる」を基底連語形式とするもので、これがそのままの形で語に化する場合と、「合わせたN」の形に変形されてから語に化する場合と、二つに分れる。前者の場合、「合〔漢N単〕」の形は一つしか無いが、「合」の発音が、また、「ガツ」と「ゴウ」とに分れる。

5.2.1は、「合〔漢N単〕」の形で生成される語の仲間で、「合掌」「合体」は、その純粋な2例である。「掌を合わせる」「体を合わせる」の基底句は、容易に認められるだろう。「合評」は、さきに1.2.1にも入れて「いっしょになって評する」と解したのだが、これは「評を合わせる」とも解されるので、ここにも入れた。語彙調査では拾われなかったが「合衆国」の「合衆」はこの類型に入る。

5.2.2の「合〔漢N単〕」には、「合名」「合資」と、どちらも、あとに「会社」の続く形を挙げた。名儀を合わせるのが「合名」、資本を合わせるのが「合資」である。

5.2.3は「合わせたN」(「合わせるN」ではない)が漢語になるもので、「合〔漢N単〕」の語化形式を取る。語例は「合板」「合金」で、多くはない。

5.2.4は、和語になって「合わせ〔和N〕」の語化形式を取るもので、「合味噌」「合酢」「合せ帯」などの語例がある。二種類以上の味噌や調味料を合わせて作った味噌や酢が合味噌、合酢である。これらでは「味噌(酢)を合わせる」が第一の基底にあり、それからできた「合わせた味噌(酢)」が第二の基底になっていると見られる。「合せ帯」はこれと違う。「帯を合わせる」は基底にない。あるものは「布を合わせる」であろう。それから「合わせた帯」の型となって、味噌や酢と合流する。

5.3は、他の動詞を後続要素に取って「合わせてVスル」を基底連語形式とするもの。5.3.1は、「合〔漢V単〕」で語化するもので、語例は「合算」だけが見えている。5.3.2は「合〔漢V単〕」の型で、「合計」「合成」「合祀」がある。それぞれ、「合わせて計算する」「合わせて成す(作り上げる)」「合わせ祀る」が基底にある。

5.4は、他の動詞を先行要素とするもので、「Vシ合わせる」を基底連語形式とする。5.4.1は「〔漢V単〕合」を語化形式とする漢語で、かなりの造語能力がある。「統合」「綜合」「総合」「都合」は、いずれも「すべて合わせる」を基底句にしている。「調合」は「調じ(ととのえ)合わせる」、「縫合」は「縫い合わせる」を基底句とする。「結合」「混合」は、前に1.3.1にもかかっている語だが、これらは、ともに、自動詞のものと同動詞のものと同種あると見たい。

「A と B とが結合(混合)する」と使うときは自動詞(1.3.1)で、「A と B とを結合(混合)する」と使うときは他動詞(5.4.1)である。なお、「結合」は「A を B と結合する」とも使えるが、「混合」の方は「A を B と混合する」とは、あまり言わないと思うから、他動詞性は「結合」の方が強いと見たい。

5.4.2は、「[和 V シ] 合わせる」と、和語に語化したもので、「組み合わせる」「つなぎ合わせる」「綴り合わせる」「縫い合わせる」「混ぜ合わせる」「結び合わせる」「擦り合わせる」「煉り合わせる」「重ね合わせる」「接ぎ合わせる」「貼り合わせる」の語例が拾われた。これによれば、「縫合」「結合」「混合」は、漢語と和語の対応形式がはっきりしている。5.4.1と5.4.2の関係は、1.3.1と1.3.2の関係と同じである。

5.5と5.6は、同意語あるいは類義語との結合関係である。5.5は「合」が先行するもので、基底連語形式には「合わせ同意 V スル」というものを設定する。語例は「合併」一つなので、語化形式を「合^{ゴツ}[漢 V 単]」とする。「合併」は普通「ガッペイ」だが、「ゴウヘイ」という読みもあるから、語化形式「合^{ゴツ}[漢 V 単]」も立ててもよい。5.6は「合」が後につくもので「同意 V シ 合わせる」を基底連語形式、5.6.1「[漢 V 単] 合^{ゴツ}」を語化形式とする。語例には「併合」「糾合」「鳩合」がある。「糾」は縄をなう(擦り合わせる)こと、「鳩」は集めることである。類義語というのは範囲のはっきりしないものであるから、「糾」や「鳩」は、「合」の類義語と扱わないで、5.4.1へ分類するのもよい。

第6の基底語を「合致させる」「調和させる」などの意味の「合わせる」とした。「いっしょにする」の「合わせる」と、実際には区別のむずかしくなるところがたくさんあるが、違う面が確かにあると考えて、原理的に区分した。各語例の解釈には異論の余地が大いにある。

6.1は独立の用法で、「合わす」「合わせる」二つの形がある。「調子を合わせる」「時計を合わせる」などと使う。これらには、「誰それに」や「正しい時刻に」のように、「～に」という補語がひそんでいる。そういう補語の存在が無くても、「顔を合わせる」「裾を合わせる」「着物の柄を合わせる」などは、「いっしょにする」ではなくて「合致させる」「調和させる」であろう。

6.2の「N を合わせる」は、目的語を伴って一語化するもの。ここには漢語の語化形式が見当たらず、和語の名詞ばかりが見える。6.2.1は「[和 N] 合わせ」となるもので、「顔合せ」「裾合せ」「柄合せ」などの語例がある。6.2.2は「合わせる [和 N]」となるもので、語例に「合せ鏡」がある。6.3は、他の動

詞のあとについて「V シ合わせる」となるもの。6.3.1は「[漢 V 単] ^ゴ合」と漢語になるもので、語例は「配合」だけが拾われている。6.3.2は「[和 V シ] 合わせる」と和語を作る形で、語例は多く、いずれも連用形による名詞化が定着している。「抱合せ(る)」「申合せ(る)」「盛合せ(る)」「向合せ(る)」「引合せ(る)」「詰合せ(る)」「炊合せ(る)」「煮合せ(る)」「食合せ(る)」「嚙合せ(る)」「埋合わせ(る)」などである。終止形は「せる」よりも「す」の方が熟しているものもある。「埋合わす」「引合わす」など。この項と5.4.2との区別は随分まぎらわしいが、この項に入れた語の方が概して名詞化が定着しているということがある。それは偶然ではなさそうだ。

7は、「共にする」という意味の「合わせる」を基底語とする。これは「合う」の方の3と対応する。つまり、「合う」の1, 2, 3が「合わせる」の5, 6, 7に対応する関係になっている。

7に属する造語類型は、7.1の一つしかない。このことも、3の状況と同じである。7.1の基底連語形式は「V シ合わせる」で、語化形式は7.1.1「[和 V シ] 合わせる」の一つである。ただし「合わせる」には「合わす」の形も許される。語例には「泊り合せる」「来合せる」「巡り合せる」「隣合せる」「居合せる」「待合せる」等がある。また、名詞形だけの特殊例に「仕合せ」がある。

以上、動詞の諸語は、

だれかと泊り合せる
 そこに来合せる
 ある運に巡り合せる
 だれかと隣り合せに住む
 その場に居合せる
 だれかと待合せる

のように、大体、「と」か「に」のつく補語を取る。「仕合せ」は、元来は「仕合す」という動詞の意味が生きていて「仕合せよし」と使われていたものが「仕合せ」だけで「よき仕合せ」の意味となったものであり、それと共に表記も「幸せ」や「俸せ」のように書かれるようになった。

8の基底語は「対比する」という意味の「合わせる」である。対比することには、一致点を求める行為がひそんでいるから、この項に属する語と6に属する語とも、まぎらわしい所がある。

8.1の基底連語形式は「N を合わせる」で、語化形式は「[和 N] 合せ」という名詞形である。語例には「絵合せ」「貝合せ」「歌合せ」「手合せ」等がある。

いずれも勝負や遊戯に関係しているのがおもしろい。調査語例には無かったが、「夢合せ」などもこの語例に入る。

8.2は他の動詞を先行要素とするもので、「Vシ合わせる」を基底連語形式とする。語化形式の1は8.2.1の「〔漢V単^ゴ合〕」で、語例は「照合」しか見えない。「照合」は次の項の「照し合わせる」と完全に対応する。

8.2.2の語化形式は「〔和Vシ〕合わせる」で、「合わす」の形も用いられる。語例には「照し合わせる」「思い合わせる」「考え合わせる」「問合せる」「打合せる」「しめし合わせる」「にらみ合せる」「付け合せる」「突き合せる」「裁ち合せる」があった。

こうして、第8項に属する諸例を見ると、いずれも、対比して判断するという要素を含んでいることがわかる。6項の方は、判断の要素をほとんど含んでいない。「引合せ」や「申合せ」には多少判断を含んでいることが感じられる。それだけ、それらの語は、8項の類型に近いものを持っている。

残る9と10は、これまでのものと、大分様子が違う。

9の基底語は、「^{あいだ}間」「中間」の意味をもった「合い」である。

基底連語形式は二つ、共に名詞間の連がりて、「合のN」と「Nの合」とである。9.1は「合のN」で、その語化形式は四つ。9.1.1は「^{あい}谷〔和N〕」で、語例には「合榧」「合間」「合着」がある。合榧は「相榧」とも書かれる。一人だけであいづちを打つことはない。だれかの相手をして打つ榧だから相榧だし、合間に打つ榧だから合榧である。「合間」は類義語を並べた関係。「合着」は、「合」が季節の上での中間を指し、冬服と夏服の間に着るものをいう。

9.1.2は「合〔外N〕」を基底連語形式とする。語例は「合オーバー」「合コート」で、「合着」と同じ意味の「合」に「オーバー」「コート」がついた。

9.1.3は「^{あい}合〔漢N〕」で、語例は「合服」一つである。9.1.4は「^{あい}合の〔和N〕」と「の」を含む。これも語例は一つで「合の手」である。

基底連語形式の第2は9.2「Nの合」、語化形式は9.2.1「〔和N〕^{あい}合」で、語例には「谷合」「山合」「問合」がある。「山合」は「山間」とも書かれる。

以上のように、この項の「合」は、時に「相」とも書き、また「間」とも書く。このことは、この項の基底語「合い」がそう強いものでなく、時に同音の「相」や「^{あい}間」に席を譲ることがあるということを語っている。

10も、基底語は「合い」であるが、この語の意味は、どうもはっきりしない。先行する語の意味を多少ぼやかすようにして、「そんな具合のもの」といった意味を添えているように思われる。この説明も全くピントがはずれている

かも知れず、つまり、現在、私にはさっぱりわからないので、基底連語形式も設定できない。単に 10.1 「N 合い」としておく。語化形式には三つをかぞえる。10.1.1 は「〔和 N〕合い」で、語例には「色合」「沖合」「頃合」「筋合」「肌合」「割合」「訳合」「場合」などがある。「色」と「色合」とで、語感はずかに違いますが、意味がどう違うか、はっきり説明しろと言われても、なかなかできない。

10.1.2 の語化形式は「〔漢 N 単〕合い」で、「度合」「歩合」「風合」「気合」等を語例とする。「風合」という語などは、「風」と「風合」とではっきり意味の違いがあることはわかるが、さりとて、「合」の意味は、やはりはっきりしない。

10.1.3 は、「意味合い」という語のためにだけ類型を設け、語化形式を「〔漢 N〕合い」とした。「意味」と「意味合い」の違いも、はっきりしないが、「意味合い」は、決して無用の言葉ではない。

IV. 疑問点・問題点

以上で、「合」の字を例とした漢字の造語機構の記述を終えるが、この記述は、現在の私の知見で一応説明のつくものだけを対象とした。現実に使われている語例でも、語構造のとらえがたいものは、生成過程の表の中に書き入れることができなかった。以下に、そういう、問題の語につき、通時的立場からの見方を加えて、多少の考察を施すことにする。語釈については、専ら『言海』の記述を参照した。

具合 言海では「工合」と記す。「くひあひノ約カ」と言い、

(1) 物事ノ組ミ立チタル状。構成

(2) デアヒ。機会

と語釈をつける。もし「くひあひ」(食い合い)なら、4.1.2 の(1)に属することとなるが、それは語源にさかのぼった時の話で、私たちがその語を使用する時の意識とは関係がないから、それをもって現代語「ぐあい」の基底構造と考えることはできない。

気合 [ココチ。ココロモチ。「一ヲ損ズ」とある。「合」にどういう意味がもっているかは知られない。なお、「気分」の項を見ると、そこにも [ココチ。ココロモチ。「一ヨシ」「一アシ」心気] と、ほぼ同じ語釈が与えてある。つまり「気分」と「気合」とは、この限りでは、ほとんど同意語と見られる。「分」

は分け、「合」は合する。「氣」(心)という不可解なものを、「分ける」と「合する」とで大体同じことを表しているのは、偶然かも知れないが、おもしろい。場合〔其場ニ行キ合ヒタル時〕と説明する。これが正しいなら、「合い」の意味ははっきりしているわけで、3.1.1に属することとなる。

引き合う 「引き合いがある」というのも、「それでは引き合わない」というのも、商売や損得の上で、よく使うことばである。この「合う」は、決して意味不明ではないが、綱引きのように引き合うのとは違うから、一応、言海の語積を見ておく。

(1) 商家ノ語、売買ヲ取組ム。

(2) 又、売買シテ利アリ。

どちらも、2.5.2に属することになるうか。

請け合う〔確ク誓フ。慥ナリトシテ証人ニ立ツ。保証〕と説明される。今も、意味は少しも変わっていないが、この「合う」が何であるかは、あまりはっきりしない。以前は、「請け合う」よりも、むしろ「請け引く」であったらう。「承引」という漢語もあり、「引く」の意味はよくわかる。「引く」と「合う」とが相通じるといふことも考えにくいので、「合う」は、やはり疑問である。

付き合う〔(1) 互ニ付ク (2) 交^{マツル}ル〕と、二つの語義が示してある。(1)の義から(2)の義が生じたものと思うが、今日使われるのは、専ら(2)の義においてだろう。(1)ならば、「互いに付き合う」で、4.1.2に属するが、(2)だと、今日の私たちの意識では、むしろ「いっしょになる」が生きて、1.3.2に属する感じとなる。

兼ね合い 勝負事などで、よく「千番に一番の兼ね合い」などというが、この「兼ね合い」が、私などにはよくわからない。『言海』の語義説明は「輕重均シクシテ、偏ラヌコト。程ニ適フコト。鈞重」となっている。千番と一番とが均り合う、すなわち、千番に一番しか実現しない(確率千分の一の)ことの実現を期待して何かをすることをいうのであろう。それにしても、この「兼ねる」の意味がよくわからないので、「合い」との関係もはっきりしない。

仕合せ〔為合ハセタル時ニ、運ニ当リ、不運ニ当ルコト。「一善シ」一悪シ〕命運との説明で、これはよくわかる。7.1.1に入れたとおり、「居合せる」や「来合せる」と同じ用法で「し合せる」という言い方があって然るべきところ、昔は知らず、今はそういう動詞の用法が無いわけである。

見合せる 「みあはず(見合)」という語について、

(1) 互ニ見ル。相見ル。「顔ヲ一」相見

(2) 此レ彼レ引キ合ハセ見テ異同ヲ知ル。対照

(3) 容子ヲ見テ、暫シ扣ヘテ居ル。控

と、3義を示している。(1)と(3)は今日もよく使うが、(2)は余り使わず、この時は「照し合わせる」「見比べる」「引き比べる」などという。しかし、(3)の語義は、(1)から出て(2)を経なければ生じない。「見合わせる」の本籍が8.2.2であることは間違いないが、(3)の意味で使う時の語意識がどこにあるかは、にわかには判定しがたい。

合点 二つの語義がある。

(1) 和歌ナドニ点ヲカクルコト。批点

(2) 転ジテ、可シト同心スルコト。ウケガフコト。承諾。承知。諾

とある。(1)の用法は現代語にはもはや無く、専ら(2)の用法だけがある。このように故事来歴があって転じた場合には、本稿で考えている基底構造観に当てはまらない。そういう語はそういう語として別の扱いをしなければならない。

合羽 「かっぱ」には「哈叭」という字も当てられ、スペイン語の *Capa* から来た外来語だという。音訳の当て字の場合にも、無論、基底句を考えることはできないので、別扱いとなる。しかし、当て字は、大ていの場合、なかなか工夫してあるものだし、慣用の久しい間に字が意味を持って来るので、現実にある基底構造を形作って来ることがある。「合羽」も、私たちは、この字から「羽織って前で合わせるもの」という意味を感じ、外来語とも思わないで使っているのではなからうか。そうであれば、「合羽」は「合わせる羽織」で、5.2.3「合〔漢 N 単〕」(合板、合金)の次に「合〔漢 N 単〕」(合羽)の項を立ててもいいことになる。「羽」を漢語単子と扱えるかどうかはまた別の問題)

都合 「都合がよい」の「都合」と、「合計」の意味の「都合」とは全く別語である。由緒正しい漢語なのは後者の方で、言海ではこれを副詞とし、〔スベアハセテ。数へ縮メテ。「一百人ニナル」一千円アリ〕とある。「都」の原義が「統べる」であり、「みやこ」も「都府」や「都城」(統治の府や城から来た。こちらの「都合」は「都べ合わせる」で、5.4.1に入れてある。問題はもう一つの方で、言海はこれを名詞とし、次のように語釈する。

〔手番^{テツガイ}ノ略転ニテ、字ハ仮借ナリト云〕手管ヲ調フルコト。テツヅキ。

「——ヲスル」——ヲ善クスル——ガヨイ——ガワルイ——次第ニ」

もしそうなら、これこそ全く当て字で、「都」にも「合」にも意味がないことになる。こういうものこそ、文句なしの別格としなければならない。

合切 「一切^{いっさいがっさい}合切」の「合切」であるが、元来こういう言葉は無かったらしい。

言海では「[合式一切ノ略カ]一切ニ同ジ。」と説く。その「合式」は〔一式。一切。ノコラズ〕である。「合式」という語をどこに分類すべきか、略されて出来た「合切」の基底にどういう構造を考えたらよいか。ともに考えなければならぬことである。

手合 「そういう手合とはつきあえない」のように人を軽蔑して言うことばで、かなりよく耳にもするし、目にもするが、言海には、この文字は見えず、「手間」と書かれている。語釈は、〔トモガラ。ナカマ。徒〕とある。「間」と「合」とは相通じるゆえに基底語の9を設けたのであるが、どちらにしても、「手合(間)」の「合」や「間」が何を意味するか、よくわからない。

合意 「合意する」と動詞にも使うし、「合意に達する」のように、名詞にも使う。考えが一致することをいうのだから、この語の基底に「意が合う」という連語があると見ていいだろう。(「意を合わせる」だとは考えにくい。)「Nガ合う」がそのまま名詞になる形は2.3.1に「[漢N単]合^{ゴウ}」とあり、語例に「吻合」「符合」があがっている。「合意」をここに入れようと思えば、「Nガ合う」が「合^{ゴウ}[漢N単]」の形で語化する項目を設けなければならないこととなる。主語が動詞のあとに位置して語化することは、原則として無いから、これは珍しい例となる。

合弁花 「合弁会社」の「合弁」は1.2.2に入れたが、「合弁」にもう一つ「合弁花」のそれがある。この「弁」は「花卉」で名詞だから、「合弁」が「弁を合わせる」なら、5.2.2に入って「合名」や「合資」と並ぶことになる。しかし、この「合弁」は、恐らく「弁を合わせる」ではなくて、「弁が合わさる」であろうから、基底連語形式は1.4である。その語化形式は、1.4.1も1.4.2も、ともに、「合」の字が後に回っている。「合弁」では「合」の方が前にあるから、別に「合^{ゴウ}[漢N単]」の項を設けて1.4.3としなければならないが、これも「合意」と同様に珍しい造語類型である。

む す び

以上で、「合」の字を例とした記述を終る。

漢字研究を現代日本語のために行うには、漢字の一字一字について、このような考察を施す必要があると考える。